

『守護国家論』引用經典の一考察

——『涅槃經』如来性品「依法不依人」を中心に——

宮 川 朋 子

一、はじめに — 問題の所在 —

『守護国家論』は、正元元年（一二五九）日蓮聖人が三十八歳のとき、立教開宗から七年目に執筆された体系的な論著であり、日蓮聖人の初期における浄土教批判の代表的な著述である。

『守護国家論』について、日蓮聖人の初期教学を代表する重要な著述として注目した先行研究として、小松邦彰氏稿「『守護国家論の一考察』を挙げることができる。¹⁾」その中で小松氏は『守護国家論』について、次のように指摘されている。

「国家論は源空浄土教批判を主目的とするものであるが、本書によって必然的に（主観的にも客観的にも）聖人自身の教学体系の構築が進められることになったのである。何となれば、そこにはすでに、五義・

三秘など後の聖人の教学体系を構築するほとんど全分野に及んでいるからである。すでに自己の立脚点をほぼ確立していた聖人は、浄土教批判を通して初期教学体系を作り上げたのである。そしてそれは、聖人のその過去の教養と現在の体験と未来への意欲とが一つになって湧き立っている著作であるといえる。²⁾」

小松氏は、聖人の浄土教批判の面から『守護国家論』における一念三千論、国土観、唱題成仏論についての問題を考察され、その結論として、浄土教批判に限局しても、その論理展開は佐渡流罪後の体系化された教学と変わりなく、本書が聖人の思想史に極めて重要な位置を有つものであるとしている。³⁾

この指摘から、立教開宗から七年目、日蓮聖人が三十八歳の時に著された『守護国家論』には、聖人の生涯を

一貫して変わることない重要な教義が説かれており、法華經の行者としての聖人の生涯を支えた理念も説かれている重要な著述であるといえる。

では、日蓮聖人はどのような引用經典を用いて初期の代表的な著述である『守護國家論』を著されたのであろうか。

その著作態度は、『守護國家論』の序文において、

「今以^テ經論^ヲ直^ス邪正^ヲ。信謗任^{ハセ}、敢無^ニ存^{スルコト}、自義^ヲ。」⁽⁴⁾

とて、仏法の正邪について全ては仏説に任せ、決して私見を加えることはしないと述べられていることが知られる。

この説示は、聖人の著作、教学的世界が仏説を根本として構築されていることを意味している。つまり、聖人教学における初期重要著述である『守護國家論』に引用される經典は、聖人教学を一貫する根幹となり、聖人の生涯にわたる弘教活動を支える理念となったと考えることができる。

本稿では、このような視点から『守護國家論』に引用される仏法としての經典を整理し、分類したい。その上で、『守護國家論』に引用されている經典の中において、

特に『涅槃經』の引用に注目されている高木豊氏等⁽⁶⁾の先行研究に示唆を受け、『涅槃經』如来性品「依法不依人」の文に着目し、仏弟子として仏の説かれた經典に絶対的な信を置き、仏弟子としてどうあるべきかを常に經典に問いたずねるという聖人の真の仏弟子としての姿勢について探ってみたいと考えている。⁽⁷⁾

なお、本稿において考察・引用する日蓮聖人遺文は、真蹟現存・曾存・断片現存・断簡現存・直弟写本現存遺文とする。

二、『守護國家論』における引用經典

『守護國家論』に引用されている經典の種類と引用箇所について、管見ながら整理し、分類すると、次の十四種の經典からの引用がみられ、その引用文の合計は一五六箇所であることが確認できる。

- (1) 『法華經』六十九箇所
- (2) 『無量義經』十五箇所
- (3) 『觀普賢經』二箇所
- (4) 『涅槃經』六十四箇所
- (5) 『仁王經』五箇所
- (6) 『華嚴經』二箇所

- (7) 『無量寿経』二箇所
- (8) 『金光明経』二箇所
- (9) 『梵網経』二箇所⁸⁾
- (10) 『大雲経』一箇所
- (11) 『大集経』一箇所
- (12) 『維摩経』一箇所
- (13) 『仏蔵経』一箇所
- (14) 『密厳経』一箇所

以上より、日蓮聖人は法華経最勝の立場にあることは言うまでもないが、その根拠として数多くの経典を引用をされていることが確認できる。

その中でも、日蓮聖人が仏の説かれた一切経に対して、仏弟子として仏の眞の言葉を聞くために、「依法不依人」という態度で経典に向かい、その経典に説かれている仏の言葉一つ一つを眞実として受け入れ、多くの疑問や葛藤のもとに、全ての教えを正面から受けとめ、法華経が最勝であるという答えを導き出されているのである。⁹⁾

すなわち、日蓮聖人は仏弟子として、仏の説かれた経典に全てを委ね、仏弟子としてどうあるべきかを経典に問いたずねるという『涅槃経』に説かれる「依法不依人」の文を守って生きられたのである。

また、『守護国家論』の引用経典について、高木豊氏は次のように指摘されている。

「日蓮は、『無量義経』を『法華経』の開経として、『涅槃経』を同経の流通分として引用していることにはかわりはなく、『法華経』と『涅槃経』との勝劣を『国家論』のなかで述べてもいるのである。しかしそれを前提にしていえば、『国家論』がまさに法華・涅槃の立場から撰述されたことは、両経引用からいってもまぎれもなく、同書が両経を支柱として構築されていたことも確かである。」¹⁰⁾

この指摘から、『守護国家論』を著された聖人にとつて『涅槃経』は法華経と同じく重要な存在であることが知られる。

日蓮聖人は、『守護国家論』の『涅槃経』は法華経の流通であることを明かす第六段において、『涅槃経』に関して次のように述べられている。

「法華経大収涅槃経拈拾^{ナリト} 見了^{エス}。涅槃経自称下劣^{ハラスル} 法華経^ハ之由^ニ。」¹¹⁾

すなわち聖人は、『涅槃経』如来性品の経文を根拠として、『涅槃経』は法華経の救済に漏れた者を救うという落ち穂拾いの働きをもつ拈拾教と理解されているこ

とが知られる。さらにその『涅槃經』自体はみずから法華經より劣ると説示していることが述べられている。¹³⁾

では、次に『守護国家論』における『涅槃經』引用について確認していきたい。

三、『守護国家論』における『涅槃經』引用

すでに指摘したように、『守護国家論』における『涅槃經』の引用は、五十二箇所みられ、『法華經』に次いで多く引用されている。

そこで、『守護国家論』に引用されている六十四箇所¹⁴⁾の『涅槃經』の品名について整理してみると、壽命品、金剛身品、名字功德品、如来性品、聖行品、梵行品、高貴徳王品、師子吼品、迦葉品の九品があげられる。以上にあげた『涅槃經』の卷数と品名と『守護国家論』における引用文・事項を分類整理し、引用回数をまとめたものが表Ⅰである。

この表Ⅰに注目してみると、如来性品が二十五箇所が一番多く、その中でも番号15「依法不依人。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經」の文が、八回もみられることである。

そこで、私は『守護国家論』の『涅槃經』引用におい

て最も多く引用されている如来性品の「依法不依人。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經」の四依の文の中でも、「依法不依人」の句に注目してみたいと思う。

ところで、前述のとおり「依法不依人」の文は、聖人の仏弟子としての生き方や、教学を構築されるうえで、重要な意味を持っている。そこで、『守護国家論』以降の真蹟完存・曾存・断片現存・断簡現存・直弟写本現存の遺文に限定して抽出すると、文応元年（一二六〇）の『一代五時図』から弘安三年（一二八〇）頃の『一代五時鶏図』までの十三遺文十四箇所である。¹⁵⁾ なかでも、『報恩抄』の一節では、日蓮聖人が真の仏弟子を目指す過程において、その修行方法を決定付けられるうえで、重要な意味をもつことが確認できる。

そのことから、初期の『守護国家論』において、「依法不依人」の文がどのような意図のもとに引用されているかを探ることの大切さを知るのである。そこで以下、これらの五文について、検討しておきたい。

(1)「依法不依人」の文の検討

『守護国家論』における「依法不依人」の文の引用を

列挙すると、以下のようである。

①「願末代諸人且闍諸宗高祖弱文無義可レ信釈迦・多宝・十方諸仏強文有義。何況諸宗末學偏執爲レ先末代愚者人師爲レ本抛經論者可レ依憑哉。故法華流通・双林最後涅槃經仏遺言・迦葉童子菩薩二言依レ法不レ依人依レ義不レ依語依レ智不レ依識依レ了義經不レ依不了義經云云。予見聞・世間以三自宗人師二称三昧発得智慧第一一無徳凡夫不レ依実經令信二法門一。以三不了義觀經等二称三時機相応教・闍了義法華・涅槃一識付三理深解微失一。非下背二如來遺言談中・依人不依法依語不依義依識不依智依不了義經不依了義經上乎。請願有レ心人加三思惟一」

②「問云レ人為レ善知識常習也。有レ以レ法爲レ知識証上乎。答云レ人為レ知識常習也。雖然於三末代一無真知識以レ法爲レ知識有多証。(中略)釈迦・多宝・十方諸仏・普賢菩薩等我等善知識也。若依此義・我等亦宿善勝二善財・常啼・班足等一。彼値二權經知識・我等値二実經知識一。彼値二權經菩薩・我等奉レ値二実經仏菩薩一。涅槃經云依レ法不レ依人依レ智不レ依識上。云二依法・者法華・涅槃常住法也。

不依人者不レ依法華・涅槃一人也。設雖爲二仏菩薩不レ依法華・涅槃一仏菩薩非善知識。況於下不レ依法華・涅槃一論師・訳者・人師上乎。依智者依レ仏。不依識者等覺已下也。今世世間道俗爲レ隱二源空之謗法失二挙徳天下二称二權化一。不レ可依用一。外道得二五通一能傾二山竭二海不レ及下無二神通阿含經凡夫上。得羅漢・現二六通二乘不レ及三華嚴・方等・般若凡夫一。華嚴・方等・般若等覺菩薩不レ及三法華經名字・觀行凡夫一。設雖有二神通智慧不レ可用二權教善知識一。」「(『昭和定本』一二三(四頁))

③「第三明下涅槃經爲二法華經流通説上之者。問云光宅法雲法師並道場慧觀等碩徳以法華經一定第四時經立二無常熟蘇味一。天台智者大師雖立二法華・涅槃同味一亦存二桔拾義一。二師共權化也。互具二徳行一。何爲レ正可レ晴我等迷心乎。答曰設雖爲二論師・訳者・違二仏教不レ判二權実二教一且可レ加レ疑。何況唐土人師於二天台・南岳・光宅・慧觀・智儼・嘉祥・善導等一乎。設雖爲三末代學者存二依法不依人義不レ違二本經本論一可レ加三信用一。」「(『昭和定本』一三〇頁)

④「此等諸宗難非^レ一。如何可^レ不^レ壞^ラ法華經信心^ニ乎。答云法華經行者心中存^ニ四十余年・已今當・皆是眞實・依法不依人等之文^ニ而外語不^レ出^レ之。隨^レ難問^レ之。抑所立宗義依^ニ何經^ニ乎。彼引^レ經隨^レ引^レ亦尋^レ之。一代五十年之間說之中自^ニ法華經^ニ先歟。後歟。同時歟。亦先後不定歟。若答^レ先以^ニ未顕眞實之文^ニ責^レ之。敢勿^レ尋^ニ彼經說相^ニ。答^レ後以^ニ不當說文^ニ責^レ之。答^ニ同時^ニ以^ニ今說之文^ニ責^レ之。答^ニ不定^ニ不定經非^ニ大部經^ニ。一時一會說亦非^ニ物數^ニ。」

〔『昭和定本』一三三頁〕

⑤「亦引^ニ智儼・嘉祥・慈恩・善導等^ニ立^テ德雖^レ難違^ニ法華^ニ・涅槃^ニ於^ニ人師^ニ者不^レ可^レ用。仰^ニ依法不依人金言^ニ故也。」〔『昭和定本』一三四頁〕

では、①から⑤までの引用内容について確認したい。

①の文意は、末代の人々に対して、釈迦仏・多宝仏・十方分身諸仏の三仏による、文証も強く義理も正しい教えを信じなければならぬとし、その理由として、法華經の流通分であり沙羅双林最後の遺言である『涅槃經』の「依法不^レ依^ニ人^ニ・依^ニ義不^レ依^ニ語^ニ・依^ニ智不^レ依^ニ識^ニ・依^ニ義經^ニ不^レ依^ニ不了義經^ニ」の文を引用され、仏の説かれた教法に依るべきであって人師の言葉に依ってはならぬ

いこと、仏の説かれた眞實の義に依るべきであって文字言語だけに依ってはならないこと、仏の眞實に依るべきであって凡夫の心情に依ってはならないこと、仏が眞實を説きつくした義經に依るべきであって眞實を説きつくしていない方便の不了義經に依ってはならないことをあげ、今の世間の様子を見ると、この仏の遺言に背いているとしている。

②の文意は、末代悪世には眞實の善師がいないため、人ではなく法を善師とする証拠の經文の一つとして、『涅槃經』の「依法不^レ依^ニ人^ニ・依^ニ義不^レ依^ニ語^ニ・依^ニ智不^レ依^ニ識^ニ」を引用され、依るべき法とは、常住仏性を説く法華經・『涅槃經』であり、依るべきでない人とは、法華經・『涅槃經』を信じない人であることを説明され、たとえ仏や菩薩であっても、法華經・『涅槃經』に依らない仏・菩薩ならば、末法の人々にとっての眞實の善師ではないことを示されている。

③の文意は、徳行の高い僧である光宅寺法雲や天台大師智顗等の意見のいずれを正しい見解として信用すれば良いのかという問いに対して、たとえインドの論師や訳者であっても、仏の教えに背いて方便教と眞實教との区別ができていない者に対しては疑いを持つべきであると

する。まして中国の人師の作った注釈書はなおさらであるとしている。しかし、末代の学者であっても、仏の教えである法に依って人師の言葉に依るべきでないという『涅槃經』の仏の遺言「依法不依人」の文を守り、宗旨の根本とする經典・論書に違背しない者は、信用しなればならないとしている。

④の文意は、法華經信仰者に対する諸宗からの非難に對して、法華經の行者が法華經への信心を守り通す対処法として、心中に深く留め、軽々しく言葉に出さないようにすべき經文として、『無量義經』の「四十余年」、法華經法師品「已今當」、宝塔品「皆是真實」の文と共に、『涅槃經』の「依法不依人」の文が挙げられている。

⑤の文意は、他宗の人がもし、華嚴宗の智儼・三論宗の嘉祥・法相宗の慈恩・淨土宗の善導などの高徳ですぐれた人師の説示は眞實であるという非難を加えてきたとしても、「依法不依人」の文の仏の誠めを堅く守り、法華經と『涅槃經』の教えに背く人師の言葉を信用してはならないと述べられている。

以上①から⑤までの引用内容について確認してみると、その引用意図は、①に指摘されているように、仏の説かれた經典に依ることなく、人師に依るとすれば、それは

仏の遺言に背くことであるということ。次いで②と③に引用されるように、末代の人々にとっての善師とは、仏の教えを守り法華經と『涅槃經』に依る者であり、法華經と『涅槃經』を信じない者の教えを信用してはならないということ。次いで④と⑤の文のように、法華經の行者にとって「依法不依人」の文は仏の誠めの言葉として守るべき文であり、重要な經文であるということ、以上三つに分類できる。

このことから、「依法不依人」の文を日蓮聖人は、仏の遺言として受けとめられ、末法における善知識は仏の説かれた眞實の教えである法華經とその流通分である『涅槃經』であり、法華經と『涅槃經』を信じる者こそ信用すべきであると説かれていることが確認できる。

つまり、日蓮聖人にとって「依法不依人」の文は、「法」に依るべき、という仏教者としてのあるべき姿を律する厳しい仏の言葉であると共に、末法の時代に迷い生きる衆生のために仏が残してくれた慈悲の言葉であり、法華經の行者にとっては守るべき重要な言葉であるといえる。

四、おわりに

以上、日蓮聖人初期の重要な著述である『守護国家論』の引用経典を整理分類し、その引用されている経典において、特に『涅槃経』如来性品「依法不依人」の文に着目し、聖人が仏弟子として仏の説かれた経典に依るという聖人の真の仏弟子としての姿勢について確認してきた。そこで、理解したことをまとめると次の通りである。

第一には、日蓮聖人遺文中における「依法不依人」の引用文は、正元元年の『守護国家論』から、弘安三年頃の『一代五時鶏図』までの十三遺文が挙げられ、生涯を通して引用されており、なかでも『報恩抄』の一節は、聖人が真の仏弟子としての修行方法を決定付けられる重要な意味をもつ引用であると確認できたことである。

第二には、日蓮聖人は「依法不依人」の文を、仏が迷い苦しむ末法の時代の人々のために残された遺言であると受けとめられていたことである。そして、聖人自身はその仏の教えを守り、末法の人々に対しても「依法不依人」という仏の言葉を守るようにと説かれていることである。

以上のことから、日蓮聖人は『涅槃経』如来性品「依

法不依人」の文を仏の遺言として受け止め、この文によって「経典に依る」という仏弟子としての姿勢を確立された。すなわち聖人は経文に絶対の信をおき、経文に説かれていることを仏の言葉としてそのまま受けとめ、経文の説示を現実世界の上に実践し行動する（色説）という、法華経の行者としての弘教活動を支える経文となったと考えられるのである。

今後の課題としては、日蓮聖人の法華経の行者としての生涯を支えた理念についての理解を深めるため、『守護国家論』における他の『涅槃経』の引用経文についても丹念に一つ一つ確認していきたい。

註

- (1) 小松邦彰稿「守護国家論の一考察」〔大崎学報〕一二五号、昭和四十六年七月
- (2) 「守護国家論の一考察」九八頁
- (3) 「守護国家論の一考察」一二二頁
- (4) 『昭和定本』九〇頁
- (5) ここに日蓮聖人の、文献主義的な立場が確認できる。日蓮聖人は『守護国家論』において経典を仏の「遺言」、「金言」等と表現され、「法華経・釈迦牟尼仏也」〔昭和定本』一二三頁〕として、法と仏は一体であると述べられている。

(6) 高木豊稿「初期日蓮における『涅槃經』の受容―『守護国家論』をめぐる―」(和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会編『古代・中世の社会と民俗文化』、昭和五十一年一月、『鎌倉仏教史研究』昭和五十七年七月再収)、関戸啓造稿「日蓮聖人の『涅槃經』引用の一考察―『一乗要決』との関連について―」『日蓮教学研究所紀要』第十号、昭和五十八年三月)

(7) 『守護国家論』には、多くの引用経典とともに、その経典に関する論釈書の引用もみられるが、その論釈書の引用整理については、今後の課題としたい。なお、高木豊氏は、『守護国家論』に引用されている論釈書として、『十住毘婆沙論』、『大智度論』、『仏性論』、『法華經安樂行儀』、『法華玄義』、『法華文句』、『摩訶止観』、『法華文句記』、『摩訶止観輔行伝弘決』、『法華翻經記』、『西方要決』、『安樂集』、『往生禮讃』、『末法燈明記』、『往生要集』、『一乗要決』、『選擇本願念佛集』を挙げている。(「初期日蓮における『涅槃經』の受容―『守護国家論』をめぐる―」四五九頁)

(8) 高木豊氏は「初期日蓮における『涅槃經』受容―『守護国家論』をめぐる―」の中で『守護国家論』引用の経論疏を示している。その中には『梵網經』は挙げられていないが、今回引用経典について確認したところ、二箇所の引用がみられたのでここに挙げた。

(9) 北川前肇氏は、日蓮聖人の教相判釈の方法について、

「聖人は最初から仏教経典を取捨分別されるのではなく、一切経を釈尊の金言・実語・真言と受けとめられ、さらに内典における実語を分別し、一切経から選ばれた最高位の法華経を選択されるという方法である」と述べている。

(『日蓮教学研究』三八〇九頁)

(10) 「初期日蓮における『涅槃經』の受容―『守護国家論』をめぐる―」四五九頁

(11) 『昭和定本』一三一頁

(12) 『大正藏經』一二卷四二〇頁 a

(13) 『報恩抄』(『昭和定本』一二〇三頁) にも同じ表現が見られる。

(14) ①文応元年『一代五時図』(『昭和定本』一二八三頁)、

②文永五年頃『一代五時図』(同二三〇三頁)、③文永中期『断簡五一』(同二四九四頁)、④文永中期『断簡五一』(同二四九四〜五頁)、⑤文永九年『開目抄』(同五八三〜五頁)、⑥建治元年『撰時抄』(同二〇四四頁)、⑦建治元年『一代五時鶏図』(同二三三〜八頁)、⑧建治二年『報恩抄』(同二二四頁)、⑨建治二年『一代五時鶏図』(同二二三八頁)、⑩建治三年『頼基陳状』(同二三八〜九頁)、⑪弘安元年『本尊問答抄』(同二五七五〜六・一五七七〜八頁)、⑫弘安元年或いは二年『一代五時鶏図』(同二三八七頁)、⑬弘安三年頃『一代五時鶏図』(同二三九〇頁)。

(15) 次の『報恩抄』の一節には、聖人の仏道を求める際の決意が述べられている。

「我等凡夫はいづれの師々なりとも信ずるならば不足あるべからず。仰てこそ信ずべけれども、日蓮が愚案はれ（晴）がたし。世間をみるに、各々我も我もといへども国主は但一人なり。二人となれば国土おだやかならず。家に二の主あれば其家必やぶる。一切経も又かくのごとくや有らん。何の経にてもをはせ、一經こそ一切経の大王にてをはずらめ。而に十宗七宗まで各々諍論して随はず。国に七人十人の大王ありて、万民をだやかならじ。いかんがせんと疑ところに、一の願を立。我れ八宗十宗に随はじ。天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく、一切経を開きみるに、涅槃經と申經に云、依レ法不レ依レ人等云云。依法と申は一切経、不依人と申は仏を除き奉て外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり。此經に又云、依テ義經不レ依テ不了義經等云云。此經に指ところ了義經と申は法華經、不了義經と申は華嚴經・大日經・涅槃經等の已今当の一切経なり。されば仏の遺言を信ずるならば、専ら法華經を明鏡として一切経の心をばしるべきか。」（『昭和定本』一一九四頁）

【表Ⅰ】

番号	巻数	品名	『涅槃經』引用經文及び事項	引用回数	品合計
1	3	壽命品	仏法付嘱諸菩薩	1	6
2	3	壽命品	不呵責等仏法中怨	3	
3	3	壽命品	正法付嘱諸王等	1	
4	3	壽命品	毀正法者苦治無有罪	1	5
5	3	金剛身品	護持正法因縁故得成就是金剛身	1	
6	3	金剛身品	護持正法者応持刀劍弓箭等	1	
7	3	金剛身品	不護法者名禿居士	1	1
8	3	金剛身品	覺德比丘・有徳国王	1	
9	3	金剛身品	護正法者応持刀劍器械	1	
10	3	名字功德品	聞是經名生惡趣者無有是処	1	25
11	6	如来性品	人四依	5	
12	6	如来性品	若天魔梵為欲破壞變為仏像	1	
13	6	如来性品	經典流布処其地其人金剛	1	8
14	6	如来性品	衆生受持如是經典不生誹謗	1	
15	6	如来性品	依法不依人 依義不依語 依智不依識 依了義經不依不了義經	1	
16	6	如来性品	乘急戒緩	1	4
17	7	如来性品	自是之前我等名邪見人	2	
18	9	如来性品	如法華中八千声聞得受記：秋収冬藏更無所作	1	
19	9	如来性品	惡比丘抄掠是經滅正法	1	25
20	9	如来性品	大涅槃經為於南方諸菩薩	1	

34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
36	33	33	33	33	30	27	27	22	19	17	14	14	12
迦葉品	迦葉品	迦葉品	迦葉品	迦葉品	師子吼品	師子吼品	師子吼品	高貴德王品	梵行品	梵行品	聖行品	聖行品	聖行品
恒河七種衆生	善星比丘	爪上土	善星比丘入墮阿鼻獄	微細之義我已為諸菩薩說	二月十五日涅槃	於波羅奈國宣說中道	既成道已梵天勸請	於惡知識生畏懼心	阿闍世等	如來雖無虛妄之言	衆生令受持大乘涅槃經	五味	仙予斷婆羅門命
5	1	4	2	1	2	1	1	1	1	1	1	4	1
14					4			1	2	6			